地中海における古代医学に関する遺跡

アスクレーピオス信仰とヒポクラテース**

池田 黎太郎*

REITARO IKEDA

医学校の標章としておなじみの「杖に絡みつく蛇」のデザインは何に由来し、何を意味するのだろうか？この疑問を解く鍵になると思われるのが、「サモスのヘルメース」と呼ばれる浮き彫りの蛇の像である。このヘルメースと呼ばれる巨大な蛇は岩の上に厳かに鎮座して人々の崇拝を受け、その足下に8の字形の頭部を持つ杖を置いている。

古代ギリシアの神々はふつう人間の姿をしているが、神である徴しとしてそれぞれの神格を表す付属物と共に描かれる。ヘルメースの場合は神々の伝令使としての職分を示す杖を持ち旅人の服装をして、それらには天空を駆け巡るための翼が付けられている。本来この伝令使の杖には蛇が居ないはずであるが医学校の標章には2匹の蛇が絡みついている。じつはここにはヘルメースの別の職分である「死者の靈魂の導師」を表すための表象が混同されているのである。

強い毒と強靱な生命力を持つ蛇は、地面の穴から地下へ自由に行き来して冥界の事情に通じ、生死の秘密を知る存在として古来畏怖と崇敬の対象となっていた。だから死者を蘇らせる能力がある神として崇拝されていたアスクレーピオスは神殿に蛇を住まわせ、蛇を侍らせた玉座に座り、巨大な蛇を巻き付かせた杖にもたれた姿で描かれている。むしろ神格化した蛇そのものがアスクレーピオスと呼ばれ崇拝されていると考える方が自然である。じっさい蛇とアスクレーピオスが同時に病人の治療にあたっている情景を描く奉納の浮き彫りがあるほどである。だから医学校の標章は蛇を軸にしてアスクレーピオスとヘルメースのイメージが混同され重ね合わされたものだろうと説明することができる。

キーワード：医学校の標章、蛇のシンボル、ヘルメース、アスクレーピオス、ガレーノス。

「翼を持つ杖」に蛇が絡みついた図案は医学部の標章として知られているが、これは何を意味しその背後にどのような思想と歴史が潜んでいるのだろうか。この問題を考える上で参考になるのが Medical Socioligoy の表紙の絵（図-1）である。この絵の中央にはギリシア神殿の特徴である柱頭

を持ち縦溝の装飾を施した大きな柱が立ち、柱の上部からは翼が大きく延びてその下に二匹の蛇が絡みついている。その右手には女性がうずくまって病んでいるらしい子供を抱きかかえており、また左手には裸形の男が跪いて鉢の中で何かを熱心に擦り碎いている。この書物が医学書であることから判断すると、この人物は医師か薬師であるらしいが、この人物と杖の関係を理解する上で役立つと思われるのが以下に述べる「サモスのヘルメース」像である。（図-2）は筆者が先年サモスの美術館で目に留めその構図に興味を持って考察した

* 順天堂大学医学部外国語研究室教授

Department of Foreign language, Juntendo University School of Medicine, Tokyo, Japan

** 第307回順天堂医学会学術集会〔Mar. 30, 2005 開催〕
〔Apr. 28, 2005 原稿受領〕

浮き彫りであり、これがこの問題の解明に役立つと思うのでそれを紹介しつつ考察を進めてみたい¹⁾。

それは美術館二階のホールの壁に掛かっている縦30センチ、横20センチほどの大理石の石碑で、それには浅浮彫の図柄が彫刻されている。その下には英独希の三ヶ国語で簡単な解説が記されていたが、その英文は次のようである。“A bas-relief with chthonian Hermes (Hermes of the dead) and three men in himation. Mid 4th century.”ギリシア語の解説はもう少し詳しく「地下のヘルメースのレリーフ、岩の上に巨大な蛇が立ち上がり、その下にはケーリュケイオンが置いてある。蛇に対して寛衣を着た三人の男が近づいて来る。B. C. 4C中期」となっている。

筆者の注意を惹いたのは、この解説にもあるとおり、ケーリュケイオン（ヘルメースの象徴である伝令の持つ杖）が岩の下に置かれていることによって、この蛇がヘルメースを表わすのだと判断されていることである。そうだとすればこの三人の男はヘルメース神を敬う祈願者か、それともヘルメース神に導かれて冥府に降る死者の霊であろう。とにかくこの図の主題を解く鍵になるのはこの杖なのである。

周知のようにギリシアの神々は、ゼウスの雷電、ポセイドーンの三叉の矛、アテナの兜と槍と盾のように、それぞれの神格を明らかにする附属物と共に彫刻や絵画に表わされている。これは自然現象や動物が神格化され崇拝される過程で、神々を人間と変らぬ姿で表現し、各々の職能を識別するために用いられた手法であった。ヘルメースに関しては多くの場合、旅人の用いるつば広の帽子ペタソスとサンダルと杖ケーリュケイオン（これらには翼がついていることもある）が描かれるのである。この装束は彼がゼウスの使者として自由に天空を駆けめぐり、地上を旅する職能を象徴する。そして図柄のスペース等の関係で附属物のみによってその神格を表わす必要のある時には、ヘルメースの場合は杖だけが描かれることがあった。しかしこの場合の杖の形状は装飾を排した単なる素朴な杖であり、それには蛇が絡みついてい

ない。そしてこの杖の特徴は上部が二重の輪になり数字の8の字形をしていることである。他方医学校や商業学校の徽章でおなじみの標章は、杖に2匹の蛇が絡みついたデザインである。

ところでこの石碑の興味深い点は、岩の上には素朴な杖だけが置かれ、そこに絡みついているはずの蛇が自分の持場を離れて岩の上に鎮座し、蛇の形のままであかかも神の如くに人々の崇拝を受けていることである。しかもその主を失った杖は依然としてその特徴のある頭部（8の字形、これは本来は先が二またに分れたオリーブの若枝）

図-1

医学書の表紙の絵によく見られる図案
Medical Sociology by William C. Cockerham

図-2 サモスのヘルメース像
岩の上の大蛇と三人の崇拝者
大蛇の足下の杖

によってヘルメースの持物であることを表わし、この岩の上に居る蛇が実はヘルメースであることを示しているのである。この図柄では蛇が主で杖は従であるように描かれているが、それではなぜふだん見慣れている医学校などの徽章の杖には蛇が巻きついた形をしているのか、また蛇とヘルメースとの関係はいかなるものであるかをこの石碑を念頭に置きながら更に考察を進めていこう。

「石の塚の神」としてのヘルメース

ヘルメースが土着の先住民族の神か、外来の神であるかは未解決の問題であるが²⁾、アルカディアのキュレーネーを崇拝の中心として、この神はギリシア各地で広く信仰されていた。彼がオリュムポスの十二神に加えられたのはホメロス以後であり、その後も他の神々に比べて従位にある者としてゼウスの伝令の役割を受け持たされている。この神の起源はその名の変種 *Hermeias*, *Hermaon*, *Herman*, *Hermaios*, *Hermauos* から類推すると, *hermax* (石の堆積, ケルン), *hermaion* (同上, 塚, 墳墓), *hermaios lophos* (ヘルメースの丘=*hermax Od.* 16, 471) などと関連があることは明らかであり、ヘルメースは「石の塚の神」でもあると考えられる³⁾。

この石の塚は主に道路の傍や分岐点に築かれて、その上に石の角柱が建てられるようになった。後になるとこれは、人間の頭の形をした頭部と *phallic symbol* とを有するいわゆる *hermae* 像へと発展し、道端ばかりでなく、都市の城門、家の門口にも置かれてその守護神として崇められるようになった (*Hermes propylaios*)。これが道端にあることから、これは旅人の標識ともなり、また夜道に出没する悪霊や盗賊から旅人を守り導く守護者とも見なされた。旅をする者はこの神に糧食の一部を捧げ、あるいはその塚に石をもう一つ積み上げてその加護を祈った (*Hermes hodopoios*)。

またこの塚の下に死者が葬られていることもあったことから、ヘルメースが死者の霊を冥界に導く案内者であるという考えも生じた (*Hermes psychopompos*, *psychagogos*)。また彼のこの能

力は逆方向にも働いて死者を地上に送り返す役割を果たすこともあった⁴⁾。このような関連からヘルメースは天上のオリュムポスの神とは別に、地下の死者の神という一面も持っている (*Hermes chthonios*)。また死は眠りとも考えられるので、ヘルメースは人間に眠りをもたらしたり目覚まししたりする神と考えられ、さらに進んで魔術を司るとも考えられてその携える杖は魔術に用いられるものとされた⁵⁾。

またこれとは別にスキタイの遊牧民の影響、あるいはミノア文化の野獣の神 (*potnios theron*) の流れをひいて牧畜の神としても崇められ、家畜の多産、豊穡を守る者としての「生殖力のシムボル *phallic symbol*」を有し、アプロディーテー、ニュムペー、パーン、ディオニューソス諸神の祭祀と結び附いて祭られるようになった (*Hermes kriophoros*)。古典時代にまとめられた神話の中では、ヘルメースはこれらのような要素と結び合わされて彫刻や絵画に表現されているが、これらの頂点をなすのがプラクシテレース作の若いディオニューソスとたわむれるヘルメースの像である。山羊の姿をしたパーンや葡萄酒の精ディオニューソスを率いるヘルメースはある時には若々しい健康な力に溢れた美しい青年神として描かれるが、古いヘルメース像にはあごひげを生やした壮年の姿のものもある⁶⁾。ところがこのサモス出土のヘルメース像は、巨大な蛇として、人間の姿をした神が持つのにふさわしいケーリュケイオンを足もとに置いた形で描かれているのである。

さて、このケーリュケイオン (*L. caduceus*, ホメロスでは *rhabdos*) とは戦時に軍使が携える杖の名称であり、それは使者の身分を明らかにしてその身の安全を保証する印しであった。神々の伝令であるヘルメースがこの杖を持つようになった経緯は『ホメロスのヘルメース讃歌』に記されている。ヘルメースは幼児のころからさまざまな才能を発揮し、竖琴を作ったりアポロンの牛を盗んだりしたが、アポロンは牛を取り返して竖琴を貰い彼と仲直りした。その際に、アポロンはヘルメースに三叉の枝の形をした黄金

の杖を贈り、彼がゼウスの託宣を伝える任務を果たす際にその身を無事に守るだろうと言った⁷⁾。このヘルメースの盗みの才能は商業の才能として発展的に拡大解釈され、神が商業学校と関係づけられる要因ともなる。

この杖は元来オリーブの枝に輪かざりを巻きつけたものであり、後にはそれが向い合う二匹の蛇の形になった⁸⁾。この蛇についてHyginusなどの神話学者が加えた説明によると、ある時ヘルメースは互いに争っている蛇を見つけてそれを杖で分けてやった。そのため後には、二匹の蛇のからみついた木の枝が平和の象徴となったのだという。このオリーブの枝は三叉に分かれた枝の中の二本を輪にして蝶結びのような形にしたものである。初期のヘルメース像の携える杖は三叉の枝のままのものや単純な輪結びのものだったが、次第に蛇の形や、天空を駆けるヘルメースの能力を示して翼の形を取るようになった。こういう発展過程から判断すると、神々の使者としてのヘルメースは本来蛇と無関係であり、彼が携える杖に蛇が絡みついていたのはなかった。使者が代表する権力を示す杖と蛇との間にはいかなる関係も無く、蛇のイメージはこれから述べる「地下の神」としてのヘルメースの役割から生ずるのである。ところがまたこれとは独立に「地下神chthonian deity」としてのヘルメースの性質から、蛇が別な意味を持つようになる。

地下の神としてのヘルメース

古代ギリシアの家には、その家の祖先や守護霊を「家の守護神heros oikouros」、あるいは「善き神霊agathos daimon」として崇める習慣があった⁹⁾。これは蛇が地の穴や壁の割れ目に棲むことから、地下の死者の霊と結びつけて考えられたことによる。この守護霊はゼウスの職能の一つとも考えられて「家産を守るゼウスZeus kteios」とか「屋敷を守るゼウスZeus herkeios」、「恵み深きゼウスZeus meilichios」などと呼ばれ、そのゼウスは巨きな蛇の姿そのもので表わされた¹⁰⁾。

またこれに類した考えは他の神々や英雄にも適用され、ゼウスの子ディオスクーロイ、医神アスクレーピオスや歴史時代以前のアテナイの初期の王エリクトニオスやケクロプスたちも蛇の形と関連して表わされた¹¹⁾。これはひとつにはギリシア先住民族が大地から生まれ大地に根ざすと言う考えに基づく。オリュンポス以前の神々は「天ウーラノス」と「大地ガイア」とが結ばれて生まれたと考えられ、彼らは巨人タイターンと呼ばれて下半身が蛇の姿で表された。これはベルリンの美術館にある「ゼウスの祭壇」の巨人像によく示されている。アテナイの初代の王たちが蛇の姿で生まれた後に、半身を蛇の姿で描かれるのも同様な考えに基づく。これは歴史起源をさかのぼればミノア時代の家の守護神といわれる「蛇身の女神snake goddess」に至る。アテナ女神もミケーナイ王家の守護神としてアクロポリスにある神殿の中に聖なる蛇を住まわせていた¹²⁾。これらの守護霊としての蛇は多くの場合崇拝する人間よりも大きな形で描かれ、その顎の下にひげのようなものを持っている(図-3)。

これらの蛇身の神の像の中でサモスのヘルメー

図-3

ス像に良く似ているものは、ベルリン美術館所蔵のビレーウス出土の「恵みの神Zeus meilichios」の像（図-4）である¹³⁾。ここでは顎の下に髭を生やした猛々しい蛇が、画面一杯に力強く身体を張って大地か岩の上にとぐろを巻いている。この図ではその蛇の正体を示すものは、その像の上に刻み込まれた“Dii Meilichioi”「恵みの神ゼウスに」という文字だけである。そしてこの蛇の顎髭は本来ある種の蛇が攻撃する時に下あごを非常に大きくあける習性があり、それを描写したものが転写される間に髭と見誤られ、後に蛇の擬人化の一過程で「蛇身の神human snake」を表すためにつけられたものと見なされている¹⁴⁾。このような経緯から判断するなら、この蛇の形をした神は先に神が存在したというよりも、守護霊としての蛇が先にあってそれが神格化される間に他の神々の属性と関連づけられ、後にその神の顕現の形の一つと見なされるようになったと思われる¹⁵⁾。サモスのヘルメース像はこの神格化、擬人化の過程にある姿を示していると考えて良いだろう。

死者の神としてのヘルメース

先に述べた「石の塚の神」としてのヘルメースは、さらに死者を冥府に導く「靈魂の導師psy-

chopompos」の役割を務めることにもなった。墓に供える「香油瓶lekythos」には墓の主の生前の姿や彼らが死後にヘルメースに導かれ「三途の川コーキュトス」で渡し船の舟守カローンに引き渡される様子が描かれることがある。その際に支払うべき渡し賃のびた錢「1オボロス」を死者の口中に含ませる風習もあった。死者の一群を導いて地下に赴くヘルメースの姿は墓の浮き彫りにもしばしば示されている。

さてここで始めに提起しておいた問題として、蛇身のヘルメースが人間の姿をしたヘルメースが持つのにふさわしい「伝令の杖ケーリュケイオン」を足もとに置いている理由を考えてみよう。なるほどホメーロスの中でもヘルメースは死者の霊を導く地下の神としての側面を示しているが、ケーリュケイオンは本来天上の神の使者としての身分を示すものであって、地下の神としての属性を示すものではないのである。それを良く表わすのがイエナ大学美術館所蔵のレキュトス（香油瓶）のヘルメース像（図-5）である¹⁶⁾。ここではヘルメースは死者の霊を地下への入り口となる大地に埋め込んだ壺の中に呼び戻すために右手に持った「魔法の杖ラブドス」を用い、左手にもつ「伝令の杖ケーリュケイオン」は神々の使者としての身

図-4 蛇崇拝

神格を持つ大蛇ゼウス・メイリキオス（恵みのゼウス）のあごひげ

図-5 2本の杖を持つ靈魂の神ヘルメース

レキュトス（葬儀用の香油壺）

左手・ケーリュケイオン（伝令の杖）、

神々の使者としての身分を示す。

右手・ラブドス（呪術師の杖）

死者を導き、または呼び戻す招魂のための杖

分を示すために添えられているにすぎない。この図ではケーリュケイオンが「地下の神chthonian deity」としてのヘルメースの所有物と考えられていないことは明らかである。

ではサモスのヘルメースがケーリュケイオンと共に描かれている理由を考えてみよう。この時代に家の守護霊としての蛇が神格化し擬人化されるようになった際に、それはいずれかの神の職能と結びつきその神の属性を示す附属物とともに描かれるようになった。この場合地下の神ヘルメースは当然ケーリュケイオンによって示されるはずであるが、蛇身の神が蛇のからみついた杖を持つのはおかしいので、この石碑の製作者が故意にその杖から蛇を取り除いたか、あるいは蛇の装飾がつく以前の古い形の杖を添えたのであろう。その結果はあたかも杖から蛇が離れてその主人となったように見えるが、本来ヘルメースには素朴な8の字形の頭部だけがある杖を持つほうが似つかわしいのである。

ところでこういう擬人化した蛇が神の名で呼ばれるのはゼウスについては幾つもの例があるが、ヘルメースについては余り例がないようだということである。J. Harrisonは「善き神霊agathos daimon」としてのヘルメースはかつては単なるphallosに過ぎず、それが蛇として表された可能性もあるが、ヘルメースが蛇となった例を知らないと述べている¹⁷⁾。この観点から判断する限り、「サモスのヘルメース」はその反証となる貴重な事例であり神話研究の上でも注目すべきものであると思う。

医神アスクレーピオス

では医学部の徽章になぜ蛇が絡みついた杖、それも翼を持った杖のデザインが用いられているのかという当初の問題に帰ろう。まず翼を持った杖は神々の使者であるヘルメースの天空を駆けめぐる能力を示すものであり、またその杖は和平を求める使者が戦意の無いことを表すオリーブの枝に起因するという説明がある。その二またに分かれた枝先を結んだ白布が翼に意匠を変えてこれらの

職能を表すようになったとも考えられる。しかしこれらはあくまでも天空を支配するゼウスとオリュンポスの神々の職能であり地下の神の属性は示していない。

ところでヘルメースには「靈魂の導師」としての地下の神の側面があった。そしてイエナ大学のレキュトスの絵に見られるように、地下の神としてのヘルメースは「魔術の杖ラプドス」を用いて靈魂を操り、「伝令の杖ケーリュケイオン」は使者としての身分を表すためにのみ携えているのである。ヘルメースはラプドスを用いて死者の靈魂を地上に呼び戻し蘇らせることもできるのである。そこに招魂の「魔術の杖ラプドス」とヘルメース、死者と蛇の関係が結びつくこととなった。この連想は死者を蘇らせる能力を持つ医神アスクレーピオスにも向けられた。

アスクレーピオスはアポロンの人間の間に生まれた半神の英雄であるが、半人半馬ケンタウロスのひとりケイローンから医術を授けられ死者を蘇らせる能力を得たとされる。彼は名だたる英雄たちを死から蘇らせて神々の権能を侵したので、ゼウスの怒りに触れて雷霆に打たれて死んだ。しかし死者を蘇らせたという伝説から、彼は病人を癒す能力もあると信ぜられ、医療の神として古代世界で広く崇められるようになった。死者を蘇らせる彼の能力が、地下へ自由に往来する生命力の強い蛇の特性と結びついて、アスクレーピオス

図-6

信仰の根幹を成したとも言える。アスクレーピオスを表す奉納の石碑には、椅子に座した神の足下に巨大な蛇がうづくまる図案（図-7）が多い。アスクレーピオス自身の神体が蛇であるとも、彼の神格が蛇で表現されたとも解釈できる（図-6）。じっさいにこの神の神殿には多くの蛇が飼育されていたと伝えられ、ローマに流行った疫病を祓うためにこの神が勧請された際に、この蛇も共に神殿から移送された事績を祝うコインがある。またアスクレーピオスがもたれかかる巨大な杖には美しい蛇が絡みついているのが通例であり（図-8）、彼の娘であるヒュギエイア（衛生hygieneの語源）も大きな蛇を手を持っている。

このような医神としてのアスクレーピオスと蛇の関係が杖に絡みつく蛇の姿で象徴されると、それはヘルメースが持つ伝令の杖のイメージと重ね合わされるようになる。そこから翼を持つ8の字形の杖に2匹の蛇が絡みつくる現在の医学校の徽章が作られた。しかしこれは両者の混同であり、アスクレーピオスの蛇は1匹である。またそれがさらに商人の神であるヘルメースの特性と結びついて商業学校の徽章にも応用されるようになるが、商業と蛇はもともと無関係であった。

アスクレーピオスの神殿における治療の実例

地中海各地にはアスクレーピオスを主神として

図-7 大蛇の化身アスクレーピオスと娘ヒュギエイア（健康）

図-8

祀る神殿が数多く建てられたが、その中でもエピダウロス、コース、ペルガモンにある神殿が有名である。とくにコース島にある神殿は長い歴史を有し医療に経験を積んだ神官が仕えていた。その神官団の中にヒポクラテースという優れた人物がいて治療の実績を積み、自分が経験した医療の実際を綿密に記録に残して古代医学の基礎を築いた。それらの神殿で行われていた医療の実態がどのようなものであったか、現存の記録でみてみよう。

古代の大旅行者パウサニアースはギリシア世界を広く旅行し、各地の神殿や建造物について正確無比な記録を残し、またそれらにまつわる神話伝説を記録している。彼の記録の正確さはそれぞれの建築物の配置や大きさの記述が現在の尺度で計測してもほぼ同一であることから推測できる。この点から彼が報告する神殿内部の神像や伝説に関する記述も信憑性が高いと判断されている。だから以下に記すエピダウロスのアスクレーピオス神殿における治療を受けた男女の奉納碑文に関する記述も、当時の人々の評価をほぼ正確に叙述しているものと考えて良いだろう。

エピダウロスにあるアスクレーピオスの神殿に詣でた病人は、まず神殿で祈ったあとで神官の指図に従って付属の内宮に泊まり込み一夜を過ごす。翌朝神官がやってきて病人の様子を見て夜の

間に見た夢の内容を報告させる。それによって経験豊かな神官は病状を判断し適切な養生方法を指示するのである。その結果病状が快方に向かい病気が治癒した患者は、それがアスクレーピオスの治療によるものと理解し、感謝の品物を奉納しまたその内容を碑文に記録して残すこともある。以下の記録は「奉納碑文」に記録されたアスクレーピオス神殿における治癒の実例である。

「奉納碑文」が記録する夢見による治療の実例¹⁸⁾

1. 夢の中での治療。「ラムプサコスのヘルモディクスは身体が麻痺していた。この男が眠っている間に神が彼を訪れて癒し、できるだけ大きな石を神殿まで運んで来るように命じた。そのときに彼が運んできた石が内宮の前に置いてある。」(no. 15)

2. 夢の中での手術。「腹部に膿腫のある男が神殿で寝ている間に夢を見た。夢の中で神は男が連れてきた従者に彼をしっかりと抑えつけているように命じて、腹部を切開しようとした。男はもがいて逃げようとしたが、皆は彼を掴まえてドアの取っ手に縛り付けた。するとアスクレーピオスは腹部を切開して腫瘍を取り除き、縫合した後で縛めを解いた。彼は何事も無かったように歩み去ったが、内宮の床の上には血が溢れていた。」(no. 27)

図-9

3. 蛇による治療(図-9)。「或る男は足指を蛇に治療してもらった。彼は足指に悪性の傷を持ち、日中に召し使いたちによって神殿の外の椅子まで運び出してもらった。彼が眠り込むと、一匹の蛇が内宮から現れて舌先で傷口を癒し、また内宮に戻って行った。その患者が目覚めると傷はすっかり癒えていた。彼が語った幻では美しい容貌の若者が現れて足先に薬を塗ってくれたということである。」(no. 17)

4. 犬による治療。「アイギナから来た少年を犬が治療した。彼は頸に腫瘍ができていた。彼が神の許を訪れると、目が覚めている状態で犬が腫瘍を舌でなめて治療した。」(no. 26)

5. 代理の参詣人。「ラケダイモンの女アラータは水腫を患っていた。彼女はラケダイモンにいたので、母親が代わりに神殿で休み夢を見た。その夢の中で神が娘の頭を切り取り、喉が下になるようにして身体を吊すと、多量の液体が流れ出た。すると神は身体を下ろして頭を元に戻した。この夢を見た後で母親がラケダイモンに戻ると、娘も同じ夢を見て元気になっていた。」(no. 21)

6. 手術の失敗の夢。「腹中にサナダムシがいるアリストゴラスはトロイゼンのアスクレーピオスの神殿で夢を見た。神はエピダウロスに行つて留守だったので、その息子たちが頭を切り離したが元に戻すことができなかった。そこで彼らはアスクレーピオスの許に使者を遣わして帰ってくれるように頼んだ。夜が明けた時に神官は、頭と胴体が切り離されている様をはっきりと目撃した。夜になってアリストゴラスは、神がエピダウロスから戻って来て頭を胴体に固定している幻を見た。それから神は腹部を切開してサナダムシを取り出し、また傷口を縫合した。それから彼女は元気になった。」(no. 23)

7. 神をあざ笑った償い。「片方の目が見えないアテーナイのアムプロシアは神に嘆願するために来た。彼女は神殿の中を歩き回り、足や目の悪い者たちがただ夢を見るだけで直るなどとは信じられないし不可能だと言って笑った。夢の中で神が傍らに立ち、彼女を治療してやるが笑った償いに

無知の証として銀製の豚の像を神殿に奉納するように命じた。こう命じた後に神は病んでいる目を切開し薬を塗り込んだ。朝になると彼女は元気になって歩くことができた。」(no. 4)

8. 蛇による懐妊。「メッセーネーのニカシブラーは子供が授かるように願って神殿で夢を見た。神は蛇を後ろに従えて彼女に近づき、蛇は彼女と交わった。一年の内に彼女は二人の子供を得た。」(no. 42)

9. 長期にわたる妊娠。「クレオーは5年間妊娠していた。妊娠の5年目に」彼女は神に嘆願するために来て、内宮で休んだ。神殿を去って境内から外に出るとすぐに彼女は息子を産み落とし、その子は誕生直後から泉で身体を洗い、母親と一緒に歩き回ることができた。」(no. 1)

古代ギリシア世界一帯にはアスクレーピオスの神殿が各地に有り、医療の神として崇敬されていた。中でも重要なのがコース島の神殿であり、この神官団の一員であるヒポクラテースが古代医学の開祖とも言うべき存在である。しかし彼は数百年にわたる神殿の歴史における医師の一人であり、彼の名で伝わる著作の大部分はこの神殿に奉仕する神官たちの経験の蓄積というべきである。古代の医療の始まりについて歴史家ヘロドトスは次のように述べている。「バビロンには医者という者がいないので、病人があるとそれを広場に連れて行く。通行人の中で同じ病気を患って直った者が居るとそばに行き自分の体験を伝え、治療方法を教えてやる。誰でも病人に病状を尋ねずに知らぬ顔をして通り過ぎることは出来ない。」(歴史1. 197)

神殿における病気の治療もこのようにして始まったのに違いない。病気に霊験あらたかであるという神の神殿に病人を連れて行き、同じ病を経験をした者から治療方法を聞き知る。その業に秀でた者が専門職の神官として神殿に奉仕するようになると、さらに経験を蓄積し技術を磨いて適切な治療方法を学び伝えていく。この意味でアスクレーピオスの神殿に仕える神官たちは類い希な観察力に優れた知性の持ち主であった。ギリシアの哲学

や科学の特徴は優れた観察力であると言われるが、その点でヒポクラテースは傑出している。またエピダウロスなど医療の中心となる神殿は広大な神域を擁し、その中には現代にまで伝わる大劇場や競技場などもあった。そして特筆すべきは神殿に冷水浴、微温湯浴、温湯浴の施設を備えた大浴場が併設されていることである。まず患者は神殿に詣でて神像に祈願した後に、神官の指示に従って隣の内宮で一夜を過ごす。翌朝になると神官は患者を診察して容態を聞き、前夜に夢を見ていればその内容を問いたず。その実例は上に記したとおりであるが、これは治療体験を信仰の言葉で語ったものと解釈すべきであろう。患者のことばと容態から判断して神官は薬を処方し適切な養生方法を指示するが、その最大の特徴は浴場施設を利用した摂生と食餌療法であろう。そして治療が長期にわたる場合には患者や付き添いの者を慰めるための劇場や運動施設も充実している。ペルガモンには半地下の瞑想室が有り、精神療法の面からの対応も完備していたと思われる。これらは古代における病院というよりもむしろ壮大な健康の総合施設と言うべきだという見方もある。宗教に基づく精神的な支えの面も軽視することはできない。このような施設が古代末期になって、キリスト教という宗教上で対立し国家宗教となった教団の勢力の伸張によって破壊され、それが支えていた医学の基盤までも抑圧されて中世の暗黒のなかに衰退していったことは惜しんでもあまりある。ヒポクラテースの後を受けて古代に輝いたガレーノスの事績を研究することによって、医学の歴史の知識は改めて掘り起こされ深められることだろう。

文 献

- 1) 池田 黎太郎：サモスのヘルメース像考察，ベディラヴィウム，1980；4：13～17.
- 2) Pauly-Wissowa: Realencyclopädie der klassischen Altertumswissenschaft, (RE), stuttgart 1893, "Hermes" の項目.

- 3) Nilsson MP: *Geschichte der griechischen Religion*, C. H. Beck, München, 1967, 503.
- 4) Harrison JE: *Prolegomena to the Study of Greek religion*, Princeton Univ. Pr., NJ; 1991. 276~283.
- 5) Homer; *Il.* 24, 343; *Od.* 10, 238, 277; *Od.* 13, 429 al.
- 6) Peck HT. ed. ; *Harper's Dictionary of Classical Literature and Antiquities*; Cooper Square Publishers, NY, 1965; 240.
- 7) Homer; *Hymn to Hermes*, 528~532.
- 8) Harrison JE: *Themis*, Merlin press, London, 279, fig. 70.
- 9) Rose HJ; *Religion in Greece and Rome*, Harper & Row, NY, 1959, 34ff. *Themis*, op. cit., 297ff.
- 10) Nilsson MP: *Greek Folk Religion*, Harper & Row, N Y, 1961. 66ff., tables 26, 27; *Themis*, op. cit., 278.
- 11) Nilsson MP: *ibid.*, tables 29, 30; G. F. R. op. cit., tafeln 27, 26; *Themis*, op. cit., 263ff.
- 12) Nilsson MP: G. F. R, op. cit., 71, 72.
- 13) Cook AB: *Zeus, A Study in Ancient Religion*, Biblo and Tannen, NY, 1965, vol. 2, part, 1108. fig. 944.
- 14) Harrison JE, *Prolegomena*, op. cit., 327.
- 15) Cook AB; *Zeus*, op. cit., 1111.
- 16) Harrison JE; *Prolegomena*, op. cit., 43~44, fig. 7.
- 17) Harrison JE: *Themis*, op. cit., 297.
- 18) Jackson R: *Doctors and Diseases in the Roman Empire*, British Museum Press, London 1988, 143~150. 訳文は「ギリシア碑文集成」からの筆者訳.

Summary

The relics of ancient medicine in the Mediterranean world ; Asclepian worship and Hippocrates

The familiar emblem of medical schools shows a winged staff with two snakes entwined around it. The significance and historical background of this design may be explained by analyzing a bas-relief called "Hermes of Samos". The relief presents a huge serpent to receive three worshippers sitting on a rock with a staff at its foot. The staff is a typical attribute of Hermes as herald of the Olympian gods.

Snakes, feared and revered in the ancient world because of their poisonous and tenacious vitality, were believed to have an ability to communicating with the underworld. Asclepius was worshipped in the ancient world as a medical deity and had many shrines over the Mediterranean area. He was represented as a thoughtful man leaning upon a staff with a serpent clinging to it, which suggests that the god himself might embody the healing power of snakes. Hippocrates was a member of the priesthood that served in a famous shrine and medical center on the island of Cos. He had accumulated medical knowledge and experience during this service which enabled him to edit a huge corpus of medical works. The emblem of medical schools must have resulted from confusion between Hermes and Asclepius, since both gods were associated with snakes.

Key words : A snake, a herald's staff, Hermes, Asclepius, Hippocrates.